

選者選評

稲畑廣太郎 先生

去年から私が選者として皆様の御句の選をさせて頂いておりますが、俳句というのは、その選も楽しいものです。高濱虚子は「選も創作である」と言っているのを御存知でしょうか。もっと幅広く考えると、多くの俳句、特に名句と言われる古今の作品を鑑賞するということは大切なことではないかと思えます。そのような名句を多く鑑賞することで、自ずと選句眼が培われてきて、自分なりの好みも生まれてくるでしょう。そして是非皆様に俳句会を開催して俳句を楽しむ場を増やして行って頂きたいと思えます。

去年は、汀子の言葉も引用して、俳句は大自然にわざわざ行かなくても身近な題材で造れる、と申し上げました。今回の皆様の作品も身近な事柄を素直に詠んだ句が多かったように思います。そして

それを、難しい言葉を使うのではなく平明に叙すという句に好感を持ちました。そんな中で特選、入選の作品の講評をさせて頂きたいと思えます。

沈黙の夜に生まれし霜を踏む

山本 音々

特選は山本音々さんの作品でした。

「沈黙の夜」という一見難しいようにも思いますが、何とも詩的に夜の静かな様子を詠んで、その沈黙から生まれる冬の季節である霜を見事に表現しておられるところが素晴らしいですね。

雪解があなたの影とのびてゆく

渡邊 愛凜

春になるとそれまで積っていた雪がだんだん解けて行く様子と、影の時間的な変化が絶妙にマッチしています。「あなたの存在も楽しいですね。」

しとしとと硬さをほぐす春の雨

上遠野 敬

冬の間は何もかもが硬く感じますが、春になり、春の雨が降りその硬さをほぐ

してゆくという季節の変わり目の喜びが明るく伝わってきます。

風鈴の風でゆらめく錦鯉

山田 遙

風鈴は夏の季節ですが、音の涼しさと、錦鯉が水の中で揺らめいている姿との対比が美しく描かれています。

涼風が通るホールに澄む音色

佐竹 輝音

野外ホールでしょうか。涼風が優しく吹いている中を澄んだ音が響いている。涼しさが心地良く感じます。

祈る手に刻まれた皺原爆忌

斉藤 龍生

原爆忌という重たい季節を素直に詠んでいます。被爆者の祈りが見て取れ、しみじみと季節が語られています。

素晴らしい作品をありがとうございます。

選者選評

選の後に

日高堯子 先生

今年の夏は初めて経験するような猛暑が長く続いた日々でした。異常気象とともに世界のおちこちで戦闘や紛争が起り、日々報道されるなかで、若い心は何を感じ取り、言葉にしようとしているのだろうかと思いつながら、今年の多くの作品を読みました。

今回特選に選んだ作品はこの一首。

桃色の病衣纏った君を見たさくらの
ような君を見たんだ 奥山奏葉

入院中の友人を見舞ったときのものでしようか。入院の事情は説明せず、ただ「君」の印象のみを鮮烈にとらえた、なかなかみごとな一首です。上句の病衣の「君」の姿を、下句で「さくらのような」と詩語に言い換えています。作者の思いもここに凝縮しているでしょう。その時の口語の表現にも魅力があります。

入選の作品は次の四首。いずれも力を感じた作品でした。

「あの時は」戦争体験話す祖母幾年
経てど褪せない記憶 山本千紘
矢印の先に未来はあるのか迷路の
ようなオープンキャンパス

滔滔と流れる水の冷たさに真白き山
の清き雪見ゆ 藤原由衣
スプーンから溢れるほどの一口を頬
張る君の白シャツ滲む 串畑采那

山本さんの歌には、お祖母さんから戦争体験を聞いたときの印象が歌われています。「あの時は」という出だしの言葉の使い方が上手い。そこから下句につづけていく自分の思いにも実感がこもっています。椿原さんの歌はオープンキャンパスを訪れたときの体験が、なかなか軽妙に歌われています。「矢印」「未来」「迷路」という言葉が巧みに生かされています。藤原さんの歌には感覚の鋭敏さがあります。滔滔と流れてくる水に手を浸したとき、滔滔と流れてくる水に源にある「真白き山の清き雪」を思い浮かべている。山や雪の「白」を視覚的に印象づけているところも鮮やかです。串畑さんの歌は恋の歌でしょう。君の口元を見つめる目に温かき、優しさが感じられるので。結句の「白シャツ滲む」まで詠み込

んだところに力を感じます。

最後に佳作の作品のなかからいくつかを上げておきたいと思います。

陽炎や揺らぐ目先の我が未来されど
歩まん時に追われて 渋谷仁愛
夕立の傘から見える天の川独り占め
する鉛色の空 和田結奈

田舎道肌焼きつく炎天の入道雲を
目指して歩く 小川なつみ
たんぼのわたげのように受け入れ
てゆくあてもなくとんでゆきたい
新垣葵

夏空をおもちゃのような飛行機が一
筆書きの旅を続ける 石原詩愛
君の声思いだすほど虚しくてまた会
える日を思い浮かべる 佐藤あやの

どの歌にも、未来を見つめて憧れや幻想や決意に震えているような心があります。この心を大切にして、言葉を、歌をつくってほしいです。

終りに、自作の短歌の書き方について一言。短歌はいれば一行詩ですので、句分けや行分けの必要はありません。意図的に一拍あげたいときの外はつづけて記してください。

選者選評

題名は付けましょう

阿部正栄 先生

私事で恐縮ですが、わが家の庭の隅に捨てられていた生まれつきの猫が、家族になり20年。その愛猫が昨年の七夕の日に、天国へ旅立ちました。猫の20歳は人では100歳ですが、その生涯をうたおうとペンを執りますが、悲しみが深いせいか、言葉が乱れとぶばかりで、詩に立ちあがりません。その日々の中、皆さんの内部の声、心の声に励まされて、一生懸命に作品を読み、選びました。

その内部の声を上手にうたにした加藤誉陽君の「青と道」が特選です。旅行先で目にする空と海の青。それに感動する作者の声が聞こえます。更に「トンネルのような憂鬱」「断崖のような不安」など比喩表現が巧みで「翡翠のように光って見えた」の通り、光り輝く作品です。

次に入選は、高田瑚晴さんの「秋」で

す。導入が良いです。夏から秋への情感をうまく、優しくうたいあげています。言葉のリズムが心地よく、最終行の「肌撫でる 初秋の色なき風」は趣たっぶりです。

次の入選は、坂田世音君の「咲く友へ」です。題名が良いです。題名も詩の中のひとひらです。題名通り、各連の「日常に必要だと気づく」「さよならの間際」がうまく溶け合い、やわらかな抒情を作っています。

入選、次は、仲川漣君の「大きな手」です。亡くなった祖父とのキャッチボールが絵になって見えます。すべてを包んでくれた祖父への感謝が溢れ、4連目の「この夏はもう居ないのだ」は胸の痛みが伝わってきます。

次の入選は、池田結衣さんの「結」です。自分の名前の素敵さの作品です。「結」は縁や人、想いが込められていて、それらが結び合い、ほつれても更に太く結んでいく見事な構成と展開に、こちらも笑顔になります。

入選最後は、間野潤美さんの「狐雨」です。束の間の雨、天気雨を「狐雨」と呼び、うたう作者の豊かな感性が流れます。「限りがあるから儂くて美しい」そ

れを心に刻みながら歩む姿が美しく、胸を打ちます。

佳作にも良い作品があります。武石怜奈さんの「人はすでに超えられている」や猪瀬香奈さんの「身体と魂」には、新しい視点と感性が光ります。また、山口歩乃果さんの「水平線に溶けた夏」は、各連に入るせりふが妙味を作り、詩的情景が生まれています。

次に全体で気になったことがあります。それは題名が無い作品です。題名は読む人への思いやり、心遣いです。挨拶の言葉と違って付けましょう。

最後になりますが、詩は最初から最後まで見えているものを写しただけでは、日記や事実の報告書で終わってしまいません。一時的な感情や常識、思いこみにとらわれずに、広大な言葉の海や広大な言葉の草原、果てしない言葉の天空に身を任せて、自由に遊び、言葉を紡いでください。次回も皆さんの力作を待っています。
(了)。

選者選評

佐藤洋二郎 先生

小説は作文やお話を書くものではなく、創作をするもの。その創作の意味は新しいことを作り出すということですが、そのことを知っているか、意識しているかで、作品は大きく変わってきます。そしてどんなジャンルの小説でも、人間を書くということが基本になります。あの人は官僚だから頭がいい、銀行員だからしっかりしている、あるいは教師だから真面目というような書き方は、人をよく見ておらず、作者の思い込みで書いているということになります。本当はそういう人たちにも、喜びや哀しみの喜怒哀楽の感情があります。それらのことを文章で掴み、形作るのが小説だと考えます。それゆえに文章力が大切になってきますし、書く力が必要だということにもなります。「作家修行は文章修行」と川端康成が言い切っているのもそのた

めです。

「特選」の「洗礼」は容姿に自信のない女性が人と比べてみたり、整形手術をしてきれいになった同僚の仕事の失敗を、自分のせいにさせられて嘔然とする姿が、深刻にならずに描かれている。結局は外身ではなく、心の美しさが大切と気づき、前向きに生きようとする姿勢が距離を取って書かれているのが良かった。

「入選」の「酸素のある海」は母を失った「僕」はいつも海にきている。潮騒を聞き波間に身を置いていると、慈しんでくれた母が近寄ってくる気がするからだ。そこに一人の高校生が姿を見せ、入水をするのかとからかわれるが、少年は親の過保護気味の呪縛に悩まされている。そんな二人のやりとりが丁寧に書かれていて好感を持った。もう少し感情の裏が書かれていれば、もっといい作品になったと惜しまれる。

「二人よがり」は結婚式の招待状が届いたが心当たりがなく、ようやく相手は子どもの頃に虐められた同級生だとわかった。罪滅ぼしのために招待状を出し

たのではないか、どういう気持ちで出したのかと疑念は払拭できず、二人で会ってもその蟠りは消えなかった。やはり許せないという感情が勝り、招待状を破る話だがその心のぶれは書けていた。

「Various」青い瞳の輪舞曲」は腕利きの楽器職人がピアノを造った。その男性が音楽学校に通う美人の女性に恋の虜になり結婚した。百年以上前に造られたピアノを中心に、それにまつわるルーツ探しのような物語を、糾う縄のように綴った作品。創作をしようとする試みがありよく練られていた。もう少し文章力があれば、作品が立ち上がるのにと思うものがいくつもあり、そのことが全体的に残念に感じた。

社会の中の私たち

久米依子 先生

悲惨で深刻な戦闘の情勢が、多くの映像や記事で伝えられた二〇二三年。私たちが一応安全な生活を送っている、世界のどこかでは市民の殺戮が行われています。そんなことを考えさせられた今年度の、課題図書の中には、社会的問題を鋭く扱う本が含まれていました。

石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』には、工場排水で汚染された魚介類を摂取し、水銀中毒におかされた水俣の人々が描かれます。恐ろしい公害病の対策が遅れた背後には、チツソ工場が地域の経済の支えだったという事情があります。人の命よりも経済性・効率性を重視する社会……。しかし振り返れば、そうした弊害は現在の日本でも見出すことができます。終った過去の話ではなく、現在にも続く私たち自身の問題として認識する必要があります。それに気づき、水俣病患者の気持ちを思いながら、戒めと

しようとする真摯な感想文が書かれました。

社会を問う姿勢は、オーウェルの小説『1984』にも顕著です。そこに描かれたのは、全体主義体制に監視され、「個」の自由が抑圧されて、逆らう者には残酷な死が与えられる国家。フィクションナルなディストピア小説ですが、感想文にもあったように、妙に現実味を帯びて感じられるのは、インターネットの情報に振り回され、自ら思考停止に向かってしまうような私たちの現状と、どこか似ていると思えるからでしょう。

七〇年以上も前の小説ですが、世界の様相は、むしろこの小説に近づいているかもしれません。その恐怖を意識して、今の自分たちがどう対処するべきかを考えた、これも真摯な感想文が書かれました。

そして、やはり架空の設定である安部公房『砂の女』にも、社会と個人の関係が示唆されています。主人公の男は砂に埋もれた不思議な村に入り込み、囚われますが、そもそも彼が辺鄙な村に出かけたのは、街での暮らしに飽き足らなかつたためでした。そして足止めされた男は、最初は必死で脱出を試みますが、やがて砂と暮らす生活に慣れ、急いで逃げ

る必要は無いと考えるようになります。自分の本来の望みを見失ったまま、反抗も、生き方の変化も諦めて、進んで環境に順応し、虫ごの虫のように自足してしまうのです。感想文では、物語を通じて「自由」や「脱出」とは何かを改めて問われたと感じたことや、また自分たちも自覚のないままに、砂の村に閉じ込められたような生を送っているのではないかと、といった考えが書かれました。

社会や環境の力は時に圧倒的で、私たちは無力感に捕われることもあります。しかし自分の心まで浸食されて、不本意な事態に留まってしまっているだけではないでしょうか。そのためにはどのような心構えが必要なのか。東畑開人『聞く技術聞いってもらう技術』の感想文には、身近な人とのコミュニケーションによって拓かれる豊かな可能性が記され、林真理子『大原御幸』には、小説を契機に、家族との関係や思い出の大切さを見つめ直すとする感想文が書かれました。まずは現在の自分の内なる力を育て、やがて状況に對峙していくこと。優れた本は、私たちが抱くべき覚悟と未来への展望をそのように教えてくれると、皆さんの感想文は伝えていきます。